入選

ある日の公園

笹川　陸玖　東京都板橋区　十六歳

気がつくと、高校の近くの公園にいた。おかしい。公園ではなく、高校に向かっていたはずなのに。そうか、夏期講習とその後の友人との集まりが面倒だったから、無意識に公園に向かっていたのか。まぁ、着いてしまったなら仕方ない。少し休んでいこう。

公園内に人はそれほどいなかった。しかし、竹林を整備するおじさん、不規則に植えられた木々の間を縫うように散歩する老夫婦、蝉を捕獲しに来たと思われる親子など、少ないながら確かに人はいた。

僕は手頃なベンチに腰かけた。夏ということもあって気温は高かったが、木々の葉が幾分か日差しを遮ってくれたため、さほど苦ではなかった。普段騒々しい蝉の合唱と、季節に似合わない爽やかな風が、心を凪いでくれる。

こうして見ると、ただ何でもない日常のように思えるが、しかし、こんな何でもないところから、自然と人間の共生を見ることができた。僕は無意識にこの公園にたどり着いたけれど、また無意識に、自然と人の共生が見られるこの公園が好きだったのかもしれない。

気がつくと、時刻は正午に迫っていた。授業に出るにはもう遅いけど、せめて友人との約束は守るとするか。僕はベンチから腰を上げた。